

私が見つけた名医

生命の危機を救ってくれた医師といかに巡り会ったか。
7名の著名人が実体験を告白。

取材・構成 長田昭二 (医療ジャーナリスト)



愛妻、妹、そして私。 命の恩人たちに、もっと報酬を

渡邊恒雄 (読売新聞主筆)



私と私の家族がお世話になった三人の名医について話をしたい。
まず一人目は、東京医科歯科大学医学部附属病院院長の坂本徹医師。彼は愛妻の命を救ってもらった。
一昨年のある朝、妻が「背中が痛い」と言う。激痛だ。たまたま私はそ

の一年前に胆石症を経験しており、症状が酷似していたこともあり「これは胆石に違いない」と考えた。私が手術を受けた東京医科歯科大に担ぎ込み、検査をすると予想通り胆石だった。それも胆のう全体が石で埋まっており、機能不全をおこしていた。

すぐに入院し、手術に向けて準備をしていると、妻が妙なことを言う。「背中が痛い……」
胆のうは体の右側だから痛む箇所が違う。十数年前にくも膜下出血を経験した妻は、その後遺症でいまは認知症なのだが、そんな彼女の何気ない発言を坂本医師は聞き逃さなかった。
「渡邊さん、大腸の検査をさせてください」
すぐに消化器科や放射線科の医師を呼び、画像診断と内視鏡による検査を

したところ、なんと大腸の一部(横行結腸と下行結腸の角あたり)にがんを見つけたのだ。

胆のう担当と消化管担当の二つのチームによる合同手術が行われ、見事に成功した。大腸のがんは、原発がんの他に転移がんが二つあった。摘出したがん組織を見せてもらったが、あんなものを腹の中に残しておいたら、妻は今ごろ命を落としていたはずだ。

こちらが「胆石だと思おう」と連れて行き、検査でも「胆石症」との診断が下りた。本来なら胆石を取り出せば一件落着のところを、患者の何気ない一言からまったく別の病気を見つけた坂本医師の眼力に、私は心底感服した。「失礼ながら奥様は認知症です。でも、認知症の方の発言には余計な思考や主観が入らないので、その情報は診断のうえで非常に役立つんですよ」
そう語る坂本医師の専門は心臓外科だ。胆のうも大腸も本来の専門ではないにもかかわらず、経験に基づく勘を發揮して、妻を助けてくれた。

八十四歳の私にとって、八十歳だろうが認知症だろうが、妻は可愛いしその存在はかけがえのないものだ。私はいま、毎日に帰ると妻の隣に座って手を握り、その日あった出来事を話すのを何よりの楽しみにしている。その大切な妻を私の人生から取り上げられたのではかなわない。もう少しで命を失うところだった妻を救ってくれた坂本医師。自身の専門にこだわらず、つねに「全身を診る」という、医師の本分に忠実なその姿勢に、私は深い感謝と尊敬の念を抱かずにはいられない。

二人目は東京慈恵会医科大学の大木隆生教授。メディアでもたびたび取り上げられる血管外科の世界的権威だが、彼は私の妹の恩人である。直径五センチにも及ぶ腹部大動脈瘤が見つかった妹から相談を受けた私は、読売新聞の医療情報部にこの分野における名医を訊ねた。すると二つ返事で「大木教授」という答えが返ってきたのだ。
動脈瘤とはその名の通り、動脈の血管壁に「瘤」ができる病気である。こ

れが破裂すると大量出血から死を招く。そんな大病に対して、大木医師は自らが開発した人工血管を用いた治療を行う。動脈の内側に人工血管を留置することで、血流は確保したまま「瘤」への血液流入を止めてしまうのだ。血液が行かなくなった「瘤」はいずれ壊死して消滅する。じつに理にかなった安全性の高い治療法であり、これによって私の妹の命は救われた。

それをきっかけに私も大木医師との交流を持つことになったのだが、そこで知った事実には愕然とする。アメリカのアルバート・アインシュタイン医科大学で人工血管を開発した彼の、現地での年俸は一億円を超えていた。医学界への貢献度を思えば、それは妥当な金額といえよう。ところが、日本に戻って母校の教授に就任した彼の年俸は八百万円だという。その後一千万円台に乗ったという噂は耳にしたが、それでもアメリカの十分の一だ。もちろん彼はそうした収入面での条件は承知の上で母校と母国のために帰国した

のであって、その奉仕の精神には本当に頭が下がるが、それにしても日本の医師の報酬の低さには驚きを禁じ得ない。今後医療の分野で世界水準を維持していくことを考えるのであれば、何より医師の報酬の見直しが急務であることを強く訴えたい。

まさに「目から鱗が落ちる」

最後は私自身の主治医、三井記念病院眼科部長の赤星隆幸医師。私の白内障手術の執刀医である。

今から三年前、私はある病院で白内障との診断を受けた。治療するには片目につき一泊ずつ、計二泊の入院を必要とし、それぞれの手術の間には一カ月間のインターバルを設けなければならぬという。新聞社の主筆がたびたび入院を繰り返すわけにもいかなないので、放置を決め込んでいた。

そんなある日、当時首相だった福田康夫さんとの会食の折にその話をしたところ、「白内障手術の名医がいるか

とを知った。家に帰って我が家の壁がアイポリーではなく真つ白だということを知った。まさに「目から鱗が落ちる」気分を味わった。

今回紹介した三人の医師は、それぞれ専門は異なるが、経験、実績、そして何より人柄において秀でた人格者である。彼らのような名医の言葉は、信用できるし信じたくなる。

妹を治療してくれた大木医師に、後日全身の血管状態を検査してもらっ

私はこれまで数多くの医師に助けられてきた。その中の誰一人いなくても現在の私はなかったはずだが、その中であえて今回は、八年前の生体肝移植手術でお世話になった医師の話をさせていただく。

四十五歳で慢性肝炎を指摘され、五十五歳でC型肝炎ウイルスのキャリア

ら紹介する」というのだ。しかし、一國の首相に医師を紹介させるわけにもいかないもので丁重にお断りしたのだが、後日、福田さんから「準備が整ったから△月△日に三井記念に行ってください」と連絡が来たのだ。驚いて行ってみると、首相夫人の貴代子さんの出迎えを受けて二度驚いた。当時病院が建て替え中か何かで、院内の配置が分かりにくかったと記憶しているが、私が迷子にならないようにと選挙区の高崎からわざわざ自分で車を運転して病院に駆け付けてくれたのだ。

甲斐甲斐しく検査のレポートを務めてくださったファーストレディは、最後に私を赤星医師に紹介すると、「あと先生にお任せします」と言って帰って行かれた。あの行き届いた気配りには、いま思い出しても感謝の念が湧いてくる。

私の目を診察し、水晶体の濁りを確認した赤星医師は、すぐに手術の段取りを整えてくれた。彼の行う白内障手術は「プレチヨップ法」という、やは

た。最新の3D画像で映し出された私の血管を見ながら大木医師は、「渡邊さんの脳は五十代の若さです。血管年齢も若いので、あと二十年は大丈夫です」と太鼓判を押してくれた。

こちらはあと四年か五年のつもりでいたから、もう読むことのなさそうな本を片端から捨てるつもりでいたのだが、名医に言われたんじゃそうもいかない。捨てるのがもったいなくなってきた。本は、いまだ処分できずにいる。

これも寿命とあきらめられた日から、 生体肝移植で奇跡の生還

河野洋平（前衆議院議長）



私自身はたとえこのまま人生を終えても、寿命なら仕方ないと考えていたのだが、子供たちがそれを許さない。生体肝移植という手段がある以上、挑戦すべきだという。初めは乗り気ではなかった私も、最後は周囲に押し切られる形で手術を決意した。二〇〇二年初頭のことだった。

しかし、それからが大変だった。当時生体肝移植ができる病院は国内に数カ所。順天堂での主治医だった消化器内科の佐藤信紘教授（現理事）と鈴木聡子准教授らが情報を分析した結果、信州大学が適当であると推薦してくれた。

であることが分かった私は、六十歳のとき（一九九七年）から本格的に治療を開始した。しかし治療成果は決して芳しいものではなく、森内閣での外務大臣の任務を終えた二〇〇一年からは急速に状態が悪化。肝性脳症で意識を失うこともたびたびあり、順天堂大学医学部附属順天堂医院に入院し、療養

り自身が開発した新手術によるもの。一点眼麻酔をした上でダイヤモンドの刃先を持つ専用のメスで目の表面を切開し、濁った水晶体を砕いて吸い出す。そして洗浄したところに人工水晶体を入れるというもので、片目の治療にかかる時間はわずか三、四分。両目でも八分ほどで終わってしまう。事実、私の手術室滞在時間はたったの二十分だった。痛くも痒くもない。眼帯も一時間ほどで外れ、私はその日のうちに会社に戻る事ができた。

こうなると、初めに診てもらった病院で「ひと月の間を挟んで二度の入院を要す」と言われたことが不思議でならない。何でも早ければいいというわけではないが、事実私の両目はたったの二十分でキレイに濁りが取れている。最初に診断した医師が「普通の医師」であるならば、赤星医師は間違いなく名医と言えよう。

病院から帰る車の中で私は、すれ違う対向車のヘッドライトの灯りがオレンジ色ではなく青白いものだとい